



炬火を掲げていざ謳う

No.81



我々の泉鳥取

2024年6月17日(月)

編集 泉鳥取高等学校閉校記念事業実行委員会

大阪府大阪市緑ヶ丘1-1-10

<https://www.osaka-c.ed.jp/custom91.html>

泉鳥取高校の人権教育

— 最初は同和問題から —



梅川邦夫先生(2019)

1976(昭和51)年、学校創立直後に設置された同和教育推進委員会(同推委)は、いかなる差別も許さない教育をめざして活動をはじめます。

同推委は各学年、各分掌・学年から委員を選出して構成されていました。主な任務は、校内における同和教育・人権教育の編成、校内で発生する差別事象への対応、同和地区出身生徒、外国籍生徒、家庭で大きな課題のある生徒、目立たないけれど大きな悩みのある生徒、障がい特性のある生徒などへの寄り添いと家庭・地域との連携、教職員や生徒への啓発が主なものでした。開校直後から同推委を長く務められた梅川邦夫先生の文章をお借りすると、

どこの学校にも教育目標とか校訓というものがあります。しかし、たいいていの教育目標や校訓は高邁な理想を掲げておりますが、抽象的で具体性に欠けているものが少なくありません。そんな中で、この世の差別を見抜き、差別と闘い、差別のない、人間が大切にされる世の中を作っていこうという同和教育・人権教育の目標は、きわめて具体的でありヒューマニスティックなものだと思うのです(20周年記念誌)。

当時は学区内に複数の同和地区が存在し、本校にも多くの地区出身生徒が在籍していました。フォローするために地区担当教員を決め、きめ細かい連携を行っていました。さらに、地区の生徒たちが差別解消に向けて取り組む部活動、部落解放研究部の活動も活発でした。左の写真は、文化祭で展示発表を行う研究部の看板です。

校内で地区出身者や同和地区そのものに対する心なき差別発言や落書きが頻発しました。ほとんどが前の

世代から伝わる、誤った価値観からくるものでした。同推委は一つひとつの事象を確認し、差別発言が発生した場合は、発言した生徒やそれを聞いた生徒から事情を聴き、差別

の構造を洗い出して振り返りを行う形で、誤った価値観を変えようとしてきました。現在残っている資料からも、一つの差別発言に対して、単に発言した生徒に指導を行うだけでなく、その友人やクラス、学年・学校全体にまで至る啓発を重ねていたことがわかります。また、「いじめ」に対する対応も、同推委が対応していました。

同和教育推進委員会から人権教育推進委員会へ

2002(平成14)年、地域改善に関する法律が期限切れとなり、国全体の同和対策が大きく変更されました。行政施策としての同和事業が終了したのです。法律の期限切れの後、同推委は「人権教育推進委員会」と改称しました。

同和問題をはじめ、外国人の人権や日本語保障、障がい理解、性認知、人間観海のトラブル、ネット上での人権侵害など生徒をめぐる人権侵害の環境は多岐に割っています。

現在泉鳥取高校では現在、LGBTQの課題とネット上の人権侵害、人間関係のトラブル等の課題を中心に人権教育を展開しています。

